

今は昔、鷹を役にて過る者有りけり。鷹の放たれたるを獲らんとて、飛ぶにしたがいて行ける程に、はるかなる山の奥の谷の片岸に、高き木のあるに、鷹の巢くひたるを見付て、いみじき事見置きたると、うれしく思て、帰てのち、いまはよき程に成ぬらんとおぼゆる程に、一子をおろさんとて、又、行て見るに、えもいはぬ深山の深き谷の、二そこゝも知らぬうへに、いみじく高き榎の木の、枝は谷にさしおほひたるが上に、巢を食て子をうみたり。鷹、巢のめぐりにしありく。見るに、えもいはずめでたき鷹にてあれば、子もよかるらんと思て、よろづも知らずのぼるに、やうやう、いま巢のもとにのぼらんとする程に、踏まへたる枝折れて、谷に落ち入ぬ。谷の片岸にさし出でたる木の枝に落ちかゝりて、その木の枝をとらへてありければ、生たる心地もせず。すべき方なし。見おろせば、そこゝも知らず、深き谷也。見あぐれば、はるかに高き岸なり。かきのぼるべき方もなし。

従者どもは、谷に落ち入ぬれば、うたがひなく死ぬらんと思ふ。さるにても、いかゞあると見んと思て、岸の端へ寄りて、三わりなく爪立てて、おそろしけれど、わづかに見おろせば、そこゝも知らぬ谷の底に、木の葉しげくへだてたる下なれば、さらに見ゆべきやうもなし。目くるめき、かなしければ、しばしも見えす。すべき方なければ、さりとてあるべきならねば、みな家に帰りて、かうかうといへば、妻子ども亡きまどへどもかひなし。あはぬまでも見にゆかまほしけれど、「さらに道もおぼえず。又、おはしたりとも、そこゝも知らぬ谷の底にて、さばかりのぞき、よろづに見しかども、見え給はざりき」といへば、「まことにさぞあるらん」と人々もいへば、行かずなりぬ。

さて、谷には、すべき方なくて、石のそばの、四折敷のひろさにてさし出でたるかたそばに尻をかけて、木の枝をとらへて、すこしも身じろぐべきかたなし。いさゝかもはたらかば、谷に落入ぬべし。いかにもいかにもせん方なし。かく鷹飼を役にて世をすぐせど、おさなくより観音経を読奉り、たもち奉りたりければ、「助給へ」と思て、ひとへに憑奉りて、此経を夜昼、いくらともなく読み奉る。「弘誓深如海」とあるわたりを読む程に、谷の底の方より、物のそよそよと来る心地のすれば、何にかあらんと思て、やをら見れば、えもいはず大きな蛇なりけり。長さ二丈斗もあるらんと見ゆるが、さしにさしてはひ来れば、「我は此蛇に食はれなんずるなめり。」と、「かなしきわざかな。観音助給へとこそ思ひつれ、こはいかにしつる事ぞ」と思て、念じ入てある程に、たゞ来に來て我ひぎのものをすぐれど、我を呑まんとさらにせず。たゞ谷よりうへさまへのぼらんとする気色なれば、「いかゞせん。たゞこれに取付たらば、のぼりなんかし」と思ふ心つきて、腰の刀をやはらぬきて、此蛇のせなかにつきたてて、それにすがりて、蛇の行くままにひかれてゆけば、谷より岸のうへさまに、こそそとのぼりぬ。

一 鷹を使って鷹の子を獲ろうとしているようだ。

二 そこゝも奥底。

三 わりなし〓ここでは、無理をしての意

四 折敷〓四角のお盆

その折、此男離れてのくに、刀をとらんとすれど、強く突きたてにければ、え抜かぬ程に、ひきはづして、背に刀さしながら、蛇はこそとわたりて、むかひの谷にわたりぬ。此男、うれしと思ひて、家へいそぎて行かんとすれど、此二三日、いきゝか身をもはたらかさず、物も食はずすごしたれば、影のやうにやせさらほひつゝ、かつがつと、やうやうにして家に行つきぬ。

さて、家には、「今はいかゞせん」とて、跡とふべき経仏のいなみなどしけるに、かく思ひかけず、よろほひ来たれば、おどろき泣きはぐ事かぎりなし。かうかうのことも語りて、「観音の御たすけとて、かく生きたるぞ」とあさましかりつる事ども、泣泣語りて、物など食ひて、その夜はやすみて、つとめて、とく起きて、手洗ひて、いつも読み奉る経を読まんとて、引あげたれば、あの谷にて蛇の背につきたてし刀、此御経に「弘誓深如海」の所に立たる見るに、いとあさましきなどはおろかなり。「こは、此経の、蛇に變じて、我をたすけおはしましけり」と思ふに、あはれにたうとく、かなし、いみじと思ふ事かぎりなし。そのあたりの人々、これを聞きて、見あさみけり。

今さら申べき事ならねど、観音をたのみ奉らんに、そのしるしなしといふ事はあるまじき事也。